

提 案 概 要

実施期日	7月29日(火)【午前】
部 会 名	小学校 国語部会

1 提案テーマ 『子どもの読みを深める国語の授業
—ものの見方を学んで文学教材を読む—』

2 単元(題材) 「わらぐつの中の神様」

3 学年 第5学年

4 平成25・26年度神奈川県小学校教育課程研究会研究主題とのかかわり

国語科における基礎的・基本的な知識及び技能の習得とこれらを活用して思考力、判断力、表現力等をはぐくむための年間指導計画、評価計画及び学習指導の工夫

5 学習指導要領との関連(内容項目)

- 第2章 第1節 国語 第2 各学年目標及び内容〔第5学年及び第6学年〕2内容 C読むこと
- (1)ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。
- エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。
- オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。

6 実践に向けての課題意識

国語の文学教材について「読み深めるとは、どういうことだろう」と疑問をもっていた。今「読むこと」の領域では、物語を読み深めるため、児童一人ひとりが自分の考えを適切に表現し、相互理解することが必要とされている。そのために言語活動の充実、「伝え合う力」の育成が求められている。自分の思いや考えを友達に伝えること、友達の考えをしっかりと聞いて自分の考えに生かすことが大切である。一方、例えば物語を読んだ時に、登場人物に感情移入し、自分の考えや思いをもつことが苦手な子どもたちが多いと感じている。子どもたちが、教材の世界に深く入るためには、「伝えるべき何か」を意識して、自分と向き合い、自分の考えをもち、読み深められるような授業が必要ではないかと考えた。さらにその考えを互いに伝え合うことで、ものごとの本質に気づき、自分自身を良い方へ変容させていく。それが教室で文学教材を学ぶことの意味であると考えた。

具体的な授業づくりの方法として、今回は「系統的な認識の方法を子どもに学ばせることで読みが深まる」という理論を元に、実践を行った。

7 実践の概要

文学教材を学習する時に「叙述に即して理由と根拠を明確にして読む」というのは基本である。私もこれまで「どうしてそう考えたの。理由は？」と常に子どもたちに問い返してきた。しかし、文学教材をとおしてもものごとの本質を見る方法を学び、自分の生き方を考えるためには、理由を問うだけでは足りない。そこから行き着いたのが、「意味づける」という考えである。この「わらぐつの中の神様」では、特に「ものが人間を意味づける」という視点を子どもに示し、わらぐつにこめられた真心や思いやりといった人間の心の中にある美しいものを、みんなで共有し味わう授業を目指した。

具体的には、

「物語が誰の視点に因るものかを常に意識しながら読む(同化・異化体験をする)」「比較(類比・対比)して考える」「理由・根拠を明らかにする」「関連づける」「意味づける」

といった認識の方法を子どもたちに提示しながら、授業を進めた。また、板書を写すことに気をとられて、思考したり友達の意見を聞いたりすることに集中できなくなる子がいる。自分の意見をまとめる手段としてはノートを活用させたものの、教師が板書したこと全てを書き写すことはあえてさせないようにした。

8 成果と課題

文学教材を読んで、「登場人物の気持ちは?」「あなたはどう思いますか」と問うだけでは、子どもは何をどう答えればいいのか分からない。言葉の響きを大切にしながら一文一文を丁寧に読み、「視点の確認」「比較の方法」「関連づける」「意味づける」という具体的な認識の方法を提示していくと、子どもたちはそれらを駆使して、驚くほど素直に物語を読み、自分の考えを深めることができた。一方で、板書、ノート指導、話し合いのもち方といった基本的な部分では、もっと効果的なやり方があるのではないかと感じた。

9 予想される協議の柱

- ・文学教材を読み深めるとは、どういうことか?教師の関わり方と子どもの「読み」について
- ・思考力・表現力を育む学習プロセスの工夫
- ・子どもが思考を深め、自分の考えや気づきを整理してノートに書く。それをクラス全体に広げ、つなげていく(伝え合う)ためには、どうすればいいのか。(手立て)